

ようこそ



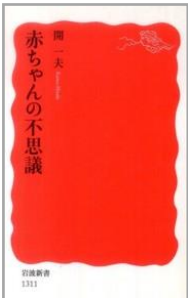
2019年PDF版（2019年7月31日発行）

読書の森へ

発行：東洋英和女学院大学図書館
E-mail：libweb@toyoeiwa.ac.jp

「情報検索ナビ in フレッシュマンセミナー」で提出されたブックレポートの中から、読んでみたいな！と感じさせる優れた推薦文を、ご本人の許可の下ご紹介いたします。

※ 表紙画像をクリックすると、KINOKUNIYA WEB STOREにて商品詳細（あらすじなど）をご覧いただけます。



開一夫著『赤ちゃんの不思議』（岩波書店, 2011.5）

皆さんは赤ちゃんに対してどのようなイメージを持っているでしょうか。生まれたばかりでまだ何も知らない、わかっていない存在といったイメージを持つ人がほとんどではないでしょうか。私もその一人でした。この本は、まだ知名度の低い赤ちゃん学という観点からの様々な実験を通して明らかになってきている、赤ちゃんが生まれながら持っている本能的な能力を私たちに教えてくれます。保育子ども学科の人は読むべき一冊だと思います。

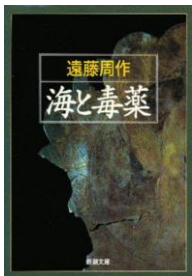
（保育子ども学科1年 福島友さん）



山田悠介[著]『アバター』（角川書店, 2013.2）

山田悠介の書く本はクセが強いとよく言われるが、それと同時に考えさせられるものがある。実際、この『アバター』という本では、周囲に流されまいと思っていた主人公がSNSの罠にはまっていってしまう。これは、今を生きる若者たちに、携帯電話との向き合い方やSNSの使用について疑問を投げかけているのだろう。この本を読んで、もう一度自分の携帯電話の使用状況を見直してみたらどうか。

（保育子ども学科1年 安間美佳さん）



遠藤周作著『海と毒薬』（新潮社, 1960.7）

戦争と聞くと自分たちとは関わりのないものと思うかもしれないが、そんなことはない。この本を読むことによって医学の進歩の裏には多くの犠牲が存在し、多くの人の精神状態がボロボロになっている現実があるということを学ぶことができるだろう。また、この小説に描かれている状況や心理は、現代社会にも形を変えて至るところで見られるため、自分を省みるきっかけとして読むべき本だと思う。

（人間科学科1年 須藤萌さん）



佐藤考一著『皇室外交とアジア』（平凡社, 2007.2）

できるだけ多くの人に会いたいと努力された上皇様の飾らない態度と、美智子様のお美貌と機転、通訳抜きで英語で会話しようとされたご夫妻の率直さは、アジア諸国の人々に歓迎された。ニュース報道でもその一部を垣間見るが、その裏にあるご夫妻のご苦労や宮内庁、外務省の苦労は知られていない。国民の一人として感じるのは、敬意と感謝である。年号が令和と改められた今こそ、「皇室外交」とは何かを知ってほしいと思う。

（国際コミュニケーション学科1年 轟見真帆さん）



三浦綾子著『塩狩峠』(新潮社, 1987.2)

あなたはキリスト教をどう思いますか？イエス様って何がそんなに偉いんだろうと思ったそこのあなた。是非この本を読んで下さい。主人公の少年は、キリスト教に疑問や嫌悪を持ちながらも聖書を道しるべとして生きていくようになります。なぜ彼は嫌いな聖書を読み、心の支えにするようになるのか。憎しみや醜さといった人間らしさが見える時、「神は愛」、この言葉は人々にどう響くのか。あなたの心にも響くものがきっとある。

(人間科学科1年 城守夏恋さん)



ヘルマン・ヘッセ著『車輪の下』(集英社, 1992.1)

私達は誰かに期待されるということに対して悪い気はしないのではないだろうか。しかし、強い期待を周りから向けられると期待に応えなければという思いから自分を苦しめてしまうということが、ハンスの人生から想像できると思う。私達は色々な思いを抱きながら大学受験に臨み、たくさんの経験をした。そういったことからハンスの思いや行動に共感できると思う。決して明るい話ではないが、心の余裕がある今だからこそ読むべきだと思う。

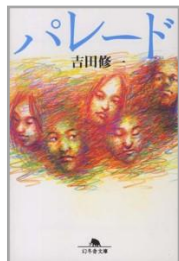
(人間科学科1年 高木玲香さん)



有川浩著『植物図鑑』(角川書店, 2009.6)

この本は、岡山出身で自然と共に育った著者が都会に出て来て、自然を食したり感じたりしなくなった、そんなリアルな背景で描かれており、出てくるキャラクターがとても魅力的です。思わず道草をして山菜がないか探したくってしまうくらい、本書に出てくる料理も美味しそうなのが特徴です。内容や表現も読みやすいので、ラブストーリーを読みたい方、読書をあまりしない若い世代の方にもとてもオススメです。

(保育子ども学科1年 小澤満里子さん)



吉田修一著『パレード』(幻冬舎, 2004.4)

この物語は、何度も読みたくなるような中毒性がある。そして温かい人間模様が描かれている部分においては、まるで人間ドラマを見ているように感じられ、人間の残酷さが描かれている部分ではミステリー映画を見ているように感じられる。この物語は二面性を持ち、私達人間の根本的な孤独が描かれているため、本の中に入ることができるのではないかとと思われる。

(人間科学科1年 別府芳野さん)



住野よる著『また、同じ夢を見ていた』(双葉社, 2016.2)

普段考えることのない、「幸せ」とは何かを考えるいい機会になった。それぞれやり直したいことがある友人達にももらったアドバイスを受け、成長していく主人公の姿と、彼女に影響され、変わっていく友人達に注目して読んでほしい。また、主人公の「人生とは一」というスヌーピーから影響を受けた口癖はどれも的を射ていて、面白いので必見だ。

(国際社会学科1年 中森梨乃さん)

* 以上9冊、タイトルの五十音順に掲載しました。

🌸🌸 たくさんの素敵な推薦文をお寄せいただき、ありがとうございました！ 🌸🌸

今回ご紹介した本はすべて、本学図書館で所蔵しています(2019年7月31日現在、版違い含む)。ぜひお手に取って読んでみてくださいね。